やゝあつて美千代は眠りからさめると、思はずかう叫んだ。

「眼がさめたね！お前さん、昨夜までの事は悉皆忘れるんだよ、いいかい？」

美千代は黙つたまゝ、おづ〳〵と

部屋の中を見廻した。

それは生れてから見た事もない立派な部屋だ華美な道具類だ。しかもこんな柔く、溫く氣持のよいベットなんてものがこの世の中にあることは全く知らなかつた。

せむし男が窓のカーテンをあけると、其處からはもう夕ぐれ近い港が一眼に見わたされた。赤い夕燒空の下に、汽船がたくさん、玩具(おもちや)のやうにうかんでゐる。

「まあ、綺麗だこと！」

思はず呟いた。その間にせむし男は、默々として、大きな旅鞄を開け、中から女もの〻下着一切から。洋服や、外套、帽子、手袋、ハンド・バック等を卓の上に並べて云つた。

「これで支度をするんだ。い〻かい、お母さんは死んぢやまつたが、お父さんはせめて一眼でいいから花ちやんに逢いたいと云つてらあ！」

美千代はまたも（花ちやん）とよばれる事が口惜しくもあり、腹立たしくもなるのだつた。

「妾ぢやないつたら、花ちやんだなんて」

「そんな事云つたつてジャグラーの處でみなし兒なのはお前さんだけぢやないか、ミチイとよばれ美千代と云つちやゐるが、それやア、そりやア藝名だらう？」

「さうよ、親なしッ兒なら私だけよ」

「で、花千代つてのは？」

「花ちやんはちやんと故郷もあるし、手紙だつてちよくちよく來るわ」

「それ御覽、俺が云ふのはね、お前さん小さい時分、いいかね、いまのジャグラー八千代に引取られる前、養老齋玄龍に育てられてた頃何んて呼ばれてたか、記憶はないかね？」

「さう云へば妾、ハー公、ハー公つてよばれてたわ」

「さうだらう、ハー公つて云やあ、春子か花子かだ。俺らたしかにジャグラー一座の美千代は本名花子と知つての上で、これだけ大骨折つたんだぜ！」

かうきかれると、美千代はジャグラー八千代の手許へ引取られた時、このせむし男が云ふやうに、花千代と云ふ藝名の娘はゐるから春千代にしようかそれとも美千代にしようかと云はれたことを思ひ出した。

「ちやア小父さん、もし妾がその花子だつたら如何するの？」

「如何するの處ぢやないよ、花ちやんはお姫様になれるんだぜ」

せむし男は眞劍だつた。が、美千代は、

「お前はみなし兒ではない、今夜俺が迎へにゆくぞ」と認めたカードを受取り、ハツと胸をおどらせた、あの時の喜びに比べていまではそんな言葉が莫迦々々しくきかれるのだつた。

「からかはないでよ」

美千代はベツトから起上ると、卓の上に並べられたスマートな洋服を身につけ、顔を洗つて、お化粧にかゝつたが、なんだか一切合切夢のやうな氣がされてならない。

「お姫様になれるつて一體何の事なのよ」

「花ちやん、お前さん、今度の事變で北支や蒙古がどうなつたか位は知つてゐるんだらう？」

「そりやア妾だつて——」

「そんなら話してきかせるがねえ、花ちやん、お前さんのお母さんは日本人だが、お父さんは綏遠省の人なんだよ」

「それぢやア支那人なの？」

「さうだよ、支那人と云つても北支の人だし、いまぢやア綏遠省城内で一と云つて二と下らない富豪なのさ。處でそのお父さん、日本へ留學してた頃に生れたのがお前さんさ。向ふへ戻つたお父さんから、何の音沙汰もないんで、お母さんがひどく氣をもみ、はる〳〵綏遠まで尋ねていつた。その留守中、西も東も判らない、やつと戸外をヨチ〳〵歩けるばかりになつてゐたお前さんをさらつていつた男があるんだ、うむと云つてひきうけるのが日本人だぜ」

美千代は、はじめの間、思ひもかけない話なのに眼をまるくしてゐたが、きいてゐるうちに不思議に眼頭が熱くなつて來た。

「そんな譯で今更十五六年もほつたらかしておきながら、とお前さんは云ふかも知れないが、一昔前針金渡りで鳴した藝人、サーカス仲間で針金先生と云やあ、誰知らぬ者もねえこの俺が、委細お前さんのお父さんから頼まれて、よし、引受けたと、日本中さがし歩いてゐたんだ。この話に嘘も僞りもねえさ、今夜、これから別府へ行くんだ！」

「えゝ、別府つて、別府溫泉？」

「うむ、今そこの病院でお父さんは病んでゐるんだよ」

美千代は下をうつむいたまゝ、唯だホロ〳〵と涙をこぼしてゐた。

（あゝ、妾にも父親はあつたのだ！　だが眞實かしら？　このせむし男、もしかしたら拵へごとを話してゐるんぢやないかしら？）

その時扉がコツ〳〵外から叩かれて、給仕が夕刊を持つて入つて來た。

せむし男は、無雜作にパラリと開けて、眼をやつたが、何故かハッと驚いたら

しく、新聞を折りたゝんでポケットへつゝこみ、

「さ、急いで出かけやう、かうしちや居られぬ！」

と美千代をせきたてた。

左腕に赤アザを

美千代が支度を急いでゐるとせむし男は、いつの間にか口髯などをつけ、マントを被つて巧みな變裝をしてゐた。

「あら！」

「驚くことはないさ、こんなせむし男と、歩くのをお嬢さん方は嫌がるからね」

やがて翌朝、目ざす別府の宿へつくと、美千代を待たせておいて、せむし男は病院へ出掛けていつたが、一時間ほどすると、眞蒼な顏色をして戻つて來た。

「どうしたの？　小父さん」
「うむ！　美千代さん、可哀想にお父さんはもう半日と保たねえらしい」
「えッ？」
「ついちやア、直ぐ逢ひたい――とかう云ふんだ」
「まあ！」
美千代はそゝくさとせむし男と一緒に自動車に乘つた。
程なく病院の應接室へひとまづ通されると、プウンと藥くさい匂ひが漂つてゐて、そこへ美千代の父に當る劉世民からいろ〳〵依頼をうけてゐると云ふ辯護士やら、いまや亡き母の姉に當ると云ふ人やらが挨拶に來た。
「おゝ！　貴女が花ちやん！　よくまあ無事で育つたねえ！」
と伯母はオイ〳〵聲をたてゝ泣いた。
「嘸かし苦勞したらうなあ！」

みんながみんな思ふ半分も云へずたゞ涙に咽ぶばかりだつた。
「いま注射の加減で一寸眠つて居られますから、暫時お待ち下さい」
さう云つて醫者が出てゆくとせむし男が、些か慌て氣味に美千代を眼でよんだ。
「なあに？　小父さん！」
應接室から廊下へ出ると、せむし男は唇をふるはせて云つた。
「實は、實は、とんでもないことになつちまつたんだ」
「え？」
「いや、肝腎なことが一つあつたんだよ、いま念を押されて弱つちまつたんだが、お前さん、左腕に小さい赤いあざがあるかい？」
「えッ」
美千代はふら〳〵つとよろめいた。
「そ、それぢやア矢張、妾ぢやないわ。花千代さんよ、あの人の左腕に赤いあざ

があるつてこと、お湯へ一緒に入つて知つてゐるのは妾だけなのよ……」

半信半疑でゐた美千代は、いよ〳〵せむし男が、自分と花千代とを間違へてゐた事を確めると俄かに腹が立つて來た。

「處がだ、美千代さん、困つたことになつちまつたんだ」

せむし男は蒼ざめた顔をピリ〳〵させ乍ら溜息をついて、

「實はね、その劉世民つてえ富豪は先刻も云ふ通り、もう半日と保つまい病人なんだし、莫大な財産を讓ると云つてゐる。その爲に辯護士やなんか來てゐるんだがねえ……」

「いやです、いやです。妾、みなし兒なればこそ、眞實の親に逢へるかと思つて、嬉しさに汽車の中でまんじりとも眠らず、小父さんにくつついて來たんぢやないか、それだのに、花千代さんの間違ひだつたなんて」

「まあ〳〵、美千代さん、たのむから左腕にちよいと赤あざをぽつとこさへさせ

てくれないか、ほんの一寸の間でいゝんだ！　な、何も人助けだよ」

「ふゝん、人助けも何もあるもんか、お前さんの金儲けにやアなるかも知れないが、妾はいやだ。妾は貧乏でも何でも眞實の親が戀しかつたんだから――」

美千代はせむし男が抱きとめる手をふりきつて喚きたてた。

「すまねえ。美千代さん、勘辨してくれ、おいらがとんでもねえ間違ひをしちまつたんだ。だが、おいらとてもなにも金儲けのためばかりぢやアねえ」

「それぢやア何さ」

「いまとなつちやあ劉世民が氣の毒になつて來たんだ。十五年前別れたきりの娘に逢へる。その娘に財産も讓りたい。その娘に綏遠城まで俺の骨を持つて歸つてもらつて、逝つた日本人の妻と同じ墓場に葬つてもらひたい！　かう云はれちやアいまさらお前！」

「それぢやア花千代さんを電報で呼んだら如何なの？」

「そんなことが出來るなら今更！」

せむし男は力なく呟いた。

「花千代さん如何かしたの？」

「うむ！　美千代さん！　こ、これを見てくれ、何もかもおいらの考へ違ひからなんだ！」

と四つに折りたゝんだ夕刊を差出した。

美千代がくりひろげると、社會面には大きく大下サーカスの怪火事件が載せられて、しかも「燒死者四名」としてあるのだ。ジャグラー八千代と道化役者三太爺さんはともかく、獅子ジュリアを救はうと炎の中へとびこんだ獅子使ひ重吉を引留める爲、花千代まで煙に卷かれて死んでしまつたのだ。

「まあ、花千代さんが！」

「さうなんだ！　死んだ者は生回らねえや、せめていま死んでく人をよろこばせてやらうぢやねえか、え？　美千代さん。おいらもうかうなつたら金儲けからぢやアねえせ。罪ほろぼしにも、お前さんに、たのんで左腕に赤あざをこさへてもらひ、それを見せて劉世民さんを安心させ、よろこばせ、死水とつてやりてえんだよ。な、美千代さん、たのむ。その上であの人の骨箱を持つてよ、綏遠とやらまで雪の長城を越えて行つてやらうぢやねえか、たのむ、たのむ！」

せむし男は廊下に這ひつくばつたまゝ涙をボロ〳〵こぼすのであつた。

美千代は何とも答へずじつと考へてゐた。

と、廊下の向ふから看護婦が急ぎあしにやつて來て、

「どうぞ、御氣がつきましたから、お逢ひ下さるならばいまのうちに！」

と云つた。

「はあ、唯今！」

せむし男は看護婦を追ひ歸すやうにして、美千代を拜んだ。

「ねえ、美千代さん！　日本人だつて支那人だつて人情に變りはねえんだ、おめえさん、劉世民つて人を氣の毒だとはおもはねえのかい？　たのむ、たのむ」

口紅の一刷け

「いやです！　いやです！」

と、すつかりすねてしまつた美千代は、なか〳〵肯といひさうにもない。怪人せむし男、針金先生は、當惑しきつて、

「ねえ、美千代さん、お願ひだ。ながい時間ぢやなし、左り腕にちよいと赤あざを描いてくれて、おお、お父さんですか？　と、その病人の枕もとへ驅けより、ボロリ涙のひとしづくも落してくれりやア、劉世民てえ人にとつて何百何千人の坊さんがお經をよんでくれるより、極樂往生疑ひなしだ。な、賴む、賴む、おい

ら、何もかも正直に云つちまふが、始めのうちはいくらか金もうけつて氣が働いてゐたさ。が、いまとなつちやア、金錢づくぢやねえんだ。劉世民が氣の毒なんだ！」

せむし男の眼には涙さへうかんで來た。

「いやです妾、花ちやんの身替りになるだけだつたらともかく、あんたが花千代さんと妾とを間違へたばつかりに、大下サーカスは火事になつちまひ、妾が助つて、花ちやんが燒け死んぢまつたなんて罪だわ」

「罪かも知れねえ。が、その罪はおいらが引受ける。な、せめてその罪ほろぼしによ、死んぢまつた人へは後でお詫びをするとして、まだ生きてる人、だが、もう直き死んでく劉世民さんを喜ばせてやつてくれ、ホツと安心させてやつてくれ」

せむし男はその頰に涙をボロ〳〵流してゐる。美千代の心持は些し動いて來た。

「それになあ美千代さん、お前には氣の毒だが、お前さん、劉世民に逢はうが逢ふまいがみなし兒だつてえことに變りはねえんだぜ。知つてるかいこの事變だ。が日本はおめえ、國民政府なり、支那の軍閥つてえものと戰つてゐるんで、支那の國民が對手ぢやねえ。いや、眞實の東洋平和をきづきあげる爲には、支那の人へいままで以上の親切をつくしてやらなけりやアならねえ時なんだ。俺だつて、お前さんだつて日本人だぜ、その日本人が不人情だと思はれてもいいか惡いか！」

美千代はしばらく默つてゐたが、やがて素直にうなづいた。

「え？　逢つてくれるか」

「ええ、左り腕でしたわね！」

「叱つ！　誰かに見られちやいけねえ、早く早く！」

せむし男は毛むくぢやらの手首で涙をこすり〳〵、他人眼につかぬやう、廊下の方へ氣を配つた。

美千代はハンド・バックの中にいれてある種々の口紅のうち、これはと思ふのを摘みあげると、そこは舞臺化粧に馴れてゐるだけ、さつと赤あざを左り腕にこさへてしまつた。

「有難え、美千代さん！」

「さ。直ぐ妾をつれてつて、　その劉さん――ぢやない、　お父さんに逢はせてよ！」

途端に美千代は、何故か妙に泣けてくるのだつた。

（も、若し、これが花千代さんの身替りでなかつたら……劉世民て人が、妾のほんとうのお父さんだつたら）

「直ぐ、直ぐおいで下さいまし」

看護婦が慌しげに扉口から二人をよびたてた。

お父さん……

美千代、つづいて針金先生が病室へ入つてゆくと、劉世民のベッドを圍んでゐた醫者や看護婦が、さつと場所を開けた。

「いま强心劑を幾本も注射しましたから、暫時お話し位は出來るでせう」

醫者は、美千代と辯護士とにかう云つた。白髮まじりのデップリ肥つた倉林辯護士は、默つて美千代を招いた。そして、

「劉さん！　花子さんです。判りますか、花子さん！」

と、一語一語、句切りをつけて云つた。

「おお！　花子、判ります、判ります」

「お父さん！」

美千代は胸せまる思ひがして、枕頭へ驅けよつた。

（ああ、これが花千代の父であらうか、この人が自分の父であつてくれたら――）

劉世民は、痩せて黄ばんだ肌に、もう血の氣はなく、うつろな眼射しを美千代の顔に投げてゐたが、すぐボロボロと涙を流した。

「花子か、逢ひたかつた、逢ひたかつた、逢ひたかつたよ。お母さんも幾度か母國へ戻りたいと云つてゐた。お前をどうしても搜し出すのだと云ひ暮してゐたが――いまは逝つてしまつた。許してお呉れ、許してお呉れ、許してお呉れ。嘸ぞ、苦勞したらうなあ！」

「いいえ、お父さん！」

美千代は泣けて泣けてあとの言葉が云へなかつた。

「許して、許しておくれ！」

劉世民の呼吸はいかにも苦しげに亂れて來た。

「どうぞ、肝腎な御用件を！」

と醫者は劉世民の脈をとりながら辯護士に催促した。

「はい！　では花子さん、この劉世民さんの遺産の五分ノ三はあなたに讓られます。いいですか、劉さんには一人だけ甥があるさうです。いづれ委しくは後で申上げますが、その方に五分の一、それから殘りの五分の一は此處に居られるあなたのお母さんの姉さんに」

「まあ！　妾などは――」

と、その老いたる婦人はオド〳〵云つた。

「お靜かに！」

と辯護士は制して、

「劉世民さん、これでよろしう御座いませうな？」

「有難う！　有難う！」

劉世民は瀕死の境にのぞんでゐる重態にも係らず、よくもこんな元氣がと思はれるほど力强い筆蹟で辯護士が作製しておいた書類に四つまで署名した。

「それから倉林さん、遺産の整理と、これの母の墓、いや私の墓……」

劉は息をあえがせながら苦しげに云ふ。

「かしこまりました。御安心なさい。一切私があとでこの方と相談しませう。こちらへのお禮その他も」

「有難う、ぢやア花子！」

「お父さん！」

安心した所爲か、美千代の手をしつかり握ると、劉世民の容態は忽ち急變した。

とだえがちな呼吸、もう物云はぬ唇、光りを失つてゆく瞳、ビリ〳〵とつれる頰、美千代の手をかたく握りしめたその掌の力も次第に弱つてゆくのだつた。

「お父さん！　お父さん！」

「花子！　さやう……なら」

三人の怪漢

劉世民から讓られた財産五分ノ三とは、果してどれほどの額であつたらうか？

美千代は勿論、針金先生にも見當がつかなかつた。併し、劉世民が白木の箱の遺骨となつてから、倉林辯護士がいろ〳〵奔走して調査した結果によると、約三百萬圓もの土地や炭山や預金の他に、現金として十萬圓近い金額が辯護士の手許に保管されてゐた。

「いやです、いやです。妾そんなもの頂くなんて――」

またもホテルの一室で美千代は頑固に首をふつた。

「判つてるよ、お前さんの氣持は、おいらだつて決して慾は出さねえ。併し、ま

だお前さんや俺がしなくちやならねえ事があるんだせ」

「え？」

「それ、劉さんの遺骨を郷里へ持つてつて花ちやんのお母さんとおなじ墓へ納めてあげることさ。それから財産の整理だ」

「いらないわ、妾！」

「判らねなえあ、美千代さんが、要るとか要らねえとかそれからの事だせ。え？一切をキチンとして、それから花ちやんの伯母さんにもわけるものはわけ、劉さんの甥とやらにも……な、いまさらお前、倉林さんにだつて、あれ程骨折つてくれたものを、こりやア身替りでござんした。インチキだつたんですとは云へやしねえ。俺がついてつてやるから安心しな。寒い北支のさ、雪に埋れた萬里の長城越えてよ、綏遠とやらへ行かうぢやないか、さうしてこそ、初めておいら二人が、些くとも支那人の劉世民さんに好いことしてあげたつてえ譯さ。ここでひき退つ

ちやア佛つくつて魂いれずだ。なあ、判つたかい？」

「――」

美千代は默つて肯いた。しかも心の中では、（そんなお金があるんなら花千代さんのお墓も立派にこさへてあげなくちやア、それからお師匠さんのジャグラー八千代、道化の三太爺さん、獅子使ひの重吉さん、みんなの爲にも何とかしてやりたい）さう思つた。

途端に扉を叩く給仕の聲。

「もし〳〵お客さんでございます」

針金先生はハッとした。倉林辯護士以外、このホテルに二人がゐる事は知つてゐない筈だつたからだ。ましてや倉林とはいま事務所で逢つて來たばかりだつた。

「誰方か訊いておくれ！」

針金先生は、眼顏で美千代に、卓上の紙幣束をかくすやうにしらせ乍らかう云

つた。

「あの、誰方樣でゐらつしやいませう？」

「何？　誰方樣も此方樣もあるもんか、こつちやア針金おやぢが、おいら達の賣物、花形のジャグラー美千代を拐かしてこのホテルへかくれてゐることをチャーンとつきとめて來たんだぜ。おい、給仕、はやくその扉をあけてもらひな、さもねえと」

美千代はドキッとした。

「先生！」

「大丈夫だ、話は金ですむこつた。俺に任せとけ、お前さんはそのカーテンのかげへかくれるんだよ」

低聲に云ふと、美千代は紙幣束を押込んだ小さなトランクを抱へたまま、隣りの寢室との境目にドッシリ下りてゐるカーテンの中へ、ひらりと靴音もたてずに

とびこんだ。

「おい、給仕さんお客さんに、どうぞ——と云ってくれ！」

扉が開くと、大下サーカスでも凄腕（すごうで）な連中三人がドヤドヤと雪崩（なだ）れこんで來た。

「針金先生、暫時だつたなあ！」

「やあ、先日はとんだことで！」

「冗談云ふねえ、とんだ事をしてくれたなあお前さんだぜ！　おい、この形はどうつけてくれるんだ。しかもお前は美千代をつれ出したらう!?」

「つれ出したよ！」

「何？」

「だが、美千代はもう内地にやアゐねえ」

「ふざけるない、針金！」

三人がポケツドからつかみ出した拳銃は、ぶきみな口を針金先生の胸元へつき

つけた。

「おい〳〵、俺を猛獸扱ひしてくれるな。あの娘はな、支那人劉世民つてえ富豪が親なんだ。その死目に逢はせてえばつかりにおいら命がけで誘ひ出したのよ、親は死に、いまはその故郷へ立つていつた。あとから俺が、ほれ見ねえ、そこにある白木の箱を持つてゆくんだ。こんな事アつくりごとぢや出來ねえせ！」

「ふうむ！」

三人の銃口はぐつたりと下へさがつた。

「時に大下サーカスの御連中、とりあへず火事見舞とあの美千代引取料つてのを出さうぢやないか。いづれ、あつちから戻つたら、きつとおいらの手で供養はするからなあ！」

ポンと投げ出した百圓紙幣の束。

「え？　いくらあるんだ？」

「些なからうが三萬圓よ。獅子も燒いたし、天幕も燒いたし、いくらかの足しにやアならう。勘辨してくれ！」

針金先生はせむしながらも天晴、流るる水の如き快辯、テキパキ形づけてゆく。

「有難え、針金先生！　おいらが惡かつた」

三人は拳銃を投げ出すと卓へ手をついて頭をさげた。

この時カーテンの蔭でふるえながら手をあはせてゐたのは美千代だつた。

「有難う、有難うよ、針金先生！」

日指すは雪の綏遠城

晴れたり北支、明朗北支。新國民政府の旗風は和かである。針金先生と美千代とは劉世民の遺骨を抱いて青島ゆきの汽船に乘つてゐた。

乘客は滿員だつた。日本人も中華民國人も、滿洲國人もいまは、大東亞共榮圏を共に築かうとしてゐる人々なのだつた。

かうした人群れをぢつと眺めて美千代は呟いた。

「ねえ先生、あの人達はみんな故郷へこがれてゆくのねえ」

「さうかもしれねえ、誰だつておめえ、骨を埋めるなら故郷の地つてえ感じは強いもんだぜ！」

さう答へた針金先生の聲に美千代はワーッと泣きだした。

「なんだ、みつともねえ。好い娘がそんな聲出して、泣くなんて何事だと思はれるぢやねえか？」

さうでなくてさへも、せむし男の怪人が、美千代ともゞ一等室へおさまつてゐるので、多くの乘客は不思議に思つてゐるところだつた。

「だつて先生、妾は——妾には——」

「あ、さうか、詰らねえことを云つて泣かせてしまつた許してくれ、なあ美千代さん。お前さんだつて考へやうによつちやア、綏遠を故郷にしたつて好いし、それから」

「いや〳〵、妾、矢張り、結局は日本へ歸りたいの。それに金も財産も何もいらないのよ。妾が心から欲しいものは別なものなの」

「なんだい？そりやア」

「親がほしい、兄妹がほしい」

「莫迦だな、そんな、出來ない相談を云つたつて、それよか、日本人はな、みんな同胞と云つて兄弟も同然なんだ。いいか、その兄弟みたいな人々が尊い血を流して支那事變を戰ひとうしてくれたんだ。いまも尙まもつてゐてくれるんだ。もつとひろい心持でその兵隊さん達を慰めてあげやうぢやないか、え？　お國の爲だぜ、それも」

今こそ嬉しい御奉公

青島から濟南へ出て、幾つもの鐵道を乘り換へた揚句、やつと雪の綏遠城に辿りついた針金先生と美千代とは、とりあへず司令部を訪れ、自治委員會へ紹介してもらはうと考へた。

處が劉世民一家のことは直ぐ判つた。素晴しい邸ではあるが、妻の日本人は逝り、事變前に主人の劉世民は病氣の爲日本へ渡り、その甥の劉彩雪が留守をしてゐた處、漢奸の疑ひをうけて行衞不明になつてゐると云ふことだつた。

「まだ判りませんのでせうか？」

針金先生は心配さうに訊いた。

「うむ、殺されたらしい。何しろ、劉世民の邸内には半ば日本の道具類や裝飾が

してあるし、書物や新聞も多かつたし、またその甥がなか〳〵の親日家でねえ」

と若い軍人はキッパリした口調で云つた。

針金先生は劉世民の死んだ事や、その遺兒花子をつれて來たこと、遺産整理のことを話すと、

「それは〳〵」

と氣の毒さうに云つて、

「劉の邸はいま事變の戰禍の爲親を失つた支那の子供、自國の兵の爲に親を殺された子供、つまりみなし兒達を收容してあるのだよ。めぐみ園と云つてね、行つてごらん、可愛い聲で、白地に赤く日の丸染めて——など唄つてゐるから。併し、弱つたな、君達がさう云ふ關係で戻つて來たとすると」

「いえ、かまひません。妾達は宿無しでいいんです」

美千代は朗らかに云ひきつた。

「でも——」

「いいえ、可哀想なみなし兒達の爲に、たのしいめぐみ園はそのままお使ひ下さいまし。妾達はこの遺骨をお墓所へ納めたら、そのあと、妾の奇術や、この先生の針金渡りでみなさんをお慰め申したいと思ひますわ？」

「偉いッ！」

針金先生、思はず大聲に叫んだ。

「軍人さん、きいて下さい。いいですか、西も東も判らぬうちに、不運からサーカスへ賣られて萍のやうに流れあるいた、こ、こんな娘でせえ、これだ！　日本の軍人さんが強いのはあたりまへでさあ、美千代さん、お前さんのその一言、それが銃後の花の心意氣だ！」

「は、は、は、は、さうか、君達はそんな藝があつたのかい。ぢやアひとつ劉家のめぐみ園の人達でも慰安してやつてもらふかね」

「いえ、いけません。まづ墓詣り、それから日本の兵隊さん達の爲に、それからみなし兒の人達のためにです。妾も、妾もみなし兒なんですもの……」

美千代はホロリとした。

大陸の奇術師

先祖代々の墓所を大切にする支那だけに、劉世民の墓所はなか〳〵豪華なものだつた。既に亡妻と己が名前とを並べて刻みつけた墓石の下へ、美千代の手で遺骨は納められた。

「いつかよい機會に、花千代さんの遺骨も持つて來ませうねえ！」

「うむ！」

針金先生と二人は顔を見合せて呟いた。綏遠の自治委員會の人々や日本の將兵

までが、この納骨式に立會つてくれ參拜もしてくれた。

「やれ〳〵、これで一形ついたが、さてこれからが大變だ！」

針金先生はめぐみ園にあてられた邸内の一部分を二人の住居にあててゐたが、その一室で倉林辯護士に手紙を書くつもりだつた。

「ちよつと先生待つて！　この書類ね、結局甥の劉何とかつて云ふ人」

「おお、劉彩雲つて云つたかな」

「さう〳〵、その人殺されてゐるとしたら、あとは伯母さんにあげる分だけ殘しときやア好いのね」

「え？　どうするんだい？」

美千代は唇を嚙みしめて答へた。

「つまり土地は、その劉彩雲さんのわけ前として、ここの自治委員會へ寄附しちまふのよ、それから、この邸も」

「成程！」

「その代り劉彩雲さんのお墓を、この土地の人達に立派に建ててもらひたいの」

「それから？」

「炭山はね、至急、誰かに買つてもらふのよ。そしてお金にしてね、五分ノ一だけあの伯母さんへ渡してもらふため倉林さんへ送り、殘りは全部、北支駐屯の日本軍へ娯樂設備のために寄附しちまふの？」

「ええッ？」

「先生、驚かなくたつて好いわよ、先生へのお禮は、ほらまだ五六萬圓殘つてゐるでせう」

「殘つてゐるとも、大下サーカスへ渡した三萬圓とあとは旅費その他何千圓も費つちやゐねえよ」

「それみんな先生にあげるわ。お禮よ」

「いらねえ！　ふざけるな、美千代！」

針金先生ははじめて美千代を大聲に叱りつけた。

美千代はハッとした。

「足りないの？　それぢやア？」

「なンだと（？）もう一遍云つて見ろ、生かしちやおかねえぞ！」

針金先生は、せむしの無恰好（ぶかくかう）な身體を、電燈のかげで壁へうつし出しながら、

「おめえがそれだけ立派な財產始末をつけるのに、おれが一文だつてもらへるか。おい見損ふなよ、俺も針金渡りにかけちやア日本一の名をとつた男だ。俺は錢は一文もいらねえ。金錢づくでねえ藝が殘つてゐらあ！」

「ふ、ふ！」

「笑ふ奴があるか？」

「だつてそんなら妾と同じよ、考へが」

「なに？」

「妾だつてジャグラー八千代師匠からうけついだ奇術師よ。いざとなればその技術一つで生きてゆくわ、もう、めそ〳〵なんかしないわよ、藝が故郷よ、藝が兄妹よ」

「偉いッ！」

「ああ、びつくりした。先生はほめる時、やたらに大きい聲するのねえ」

「びつくりさせて御免よ！　だが、美千代さん、お前は立派な大和撫子だ。よしッ、さうときまつたらこの六萬となにがしの金でジャグラー師匠や花ちやんは勿論、みんなの供養をしたり、いろ〳〵まあ始末をつけるとして、他の財産はお前の思ひ通り明日でも司令部へいつて一切任せてしまへばいいんだ。それから俺達はな――」

「皆さんの慰安でせう？」

「うむ、雪の長城線に添つて、いろんな土地に駐屯してゐる兵隊さん達を慰めて歩かう、それがつとめだ。え、美千代さん、それぢやアぐつすりと寝な、おいら倉林辯護士さんへすぐ手紙書くから」

間もなく、針金先生は、靜かな美千代の寝息をききながら筆を走らせてゐた。

戸外は風だ。怖ろしい吹雪だ――

總てを清算した針金先生と美千代の二人は、雪橇に並んで乘つて綏遠城を出發した。行途は銀一色の世界。萬里の長城がうね〳〵と雪に埋れてゐる。低く垂れた雪空に、銃聲が響き渡つた。

「あら、また鐵砲よ！」

「兵隊さんの演習だよ」

雪橇の馭者は鞭をピュッピュッと鳴らした。

「ねえ、先生！」

「なんだ？」

「妾、これから先生をお父さんつてよばふかしら！」

「よからう、おいらも美千代さんなんて云ふよりア、美っちやんとか、おい美千代とか云ふ方が氣が樂だあ！」

「ぢやあ！　お父さん！」

「なんだ、早速だな。は、は、は、俺らあむかしからおめえのお父さんだつたみてえな、氣がして來たぜ。は、は、は、は……」

美千代も笑ひかけたが、二人は、吹雪に顔をそむけていつか泣いてゐた。

ああ、大陸の奇術師よ……今宵の泊りはどこであらうか？

雪橇の鞭はさびしく鳴り、馬も寒さにいなないてゐる。

滿月鄕の勇士

アッ！　崇仁傑だッ

はるか彼方の警戒哨から、急をしらせる一發の銃聲に、川口團長はハッとして伸びあがつた。

森鐵次も弟の三造も、枯れた野草のはてを見つめると、馬だ！　馬で驅けてくるのだ。それも唯だ一騎である。

双眼鏡を覗いてゐた團長は、あつ！　と驚いた。

「や、崇仁傑だぞ……」

「ええッ」

この滿月郷にとつては憎むべき仇敵たる紅槍匪の一頭目だ。

あちこちの小舍からバラ〳〵と驅け集つて來た團員に、三造は叫んだ。

「銃器とれいッ！」

「待て、慌てるな」

川口團長はニッコリした。

「崇仁傑は白旗を振つてゐるぞ、歸順だ、歸順だ」

團員達はおもはずワーッと歡聲を揚げた。

時は昭和八年、第×次入植、滿月郷の出來事——

歸順匪賊は語る

本部と云つてもおなじ天地根元作り丸太を兩方からよせかけ、棟木を渡したものにアンペラで屋根が葺いてあるのだ。片隅のストーヴにはドロノキが燃えてゐる。

「――松花江沿ひの土地が日本政府に買はれたときいて、この附近の土民は明日にも追ひたてられるかと動揺しはじめました。そこへこの満月郷が入植し、しかも土民達には種痘だのコレラの注射だのを強制されたので、これは満人を滅す企てだなと考へ違ひしたのでした。この恐怖や不安に乗じて我々は、反満抗日の旗を掲げたのでしたが――」

崇仁傑は言葉をとぎらすと、急にしめつぽく涙ぐみ、首をガックリとうなだれた。

「――自分の留守に唯つた一人の男の子が種痘を施されたときいて氣が氣でなく、今日は明日はと子供の身を案じてゐました處、部落中天然痘がはやつても、その子だけはかからないのでした。これは俺の考へが間違つてゐた――かう思ふと、これ迄抵抗してゐた事が申譯なくつて、恥かしくつて……」

「よく分つて下さつた、有難う、有難う」

川口團長はホッとしても、さも嬉しげに頷いた。

薄暗いカンテラの灯かげを眞額にうけた崇仁傑のキリリとした顔は、亂暴狼藉無頼な匪賊の面影は更になく、意志と正義感の強い壯年志士の如くにも見られるのであつた。

「團長さん、私が仲間を裏切つて滿月郷へ歸順したからには、この命をさしあげたも同然、捨てる時がくればいつでも捨てます。私の屍をのりこえ〳〵あなた方は、この大平原を耕して下さい。日本人の爲ばかりぢやアない。我々滿洲人の爲にも、お願ひです。お願ひです」

「よろしい、引受けましたぞ」

川口團長は感激こめて彼の手をかたくかたく握りしめるのだつた。

どうせ生きては還らん

それから二月——雪や氷にとざされた滿月郷は、春よりも夏よりもいきいきとした。崇仁傑が歸順したので地理に明るいその一味や土民達が水略開拓の應援に加はつたからである。

折も折、人眼をしのんで紅槍匪本據からやつてきた密使が、崇仁傑に一書を渡すと再び馬で驅け去つた。

「兄さん、どうかしたの？」

氣づかはしげに小首を傾げたづねる妹の春蘭に、

「いや、何んでもないさ、心配するな」

崇仁傑は強ひて笑つて見せたものの胸中はおだやかでなかつた。

大頭目王彩雲からの使者はこれで三度目なのである。

いま受けとつた密書には『我等の掟に仍て命令す、直ちに歸り來れ』と書いてあるのだ。

滿月郷の人々が、

「俺達は百姓だ、米がほしい、米のとれる水田が作りたい」

その希望ゆゑに大地を掘り進んだ千米の大水路。その完成を眼前に控へてゐるいま、若し大頭目の申出を斷つたら、紅槍匪の大集團が、この滿月郷に襲擊してくるかも知れないのだ。

「春蘭、お前も俺の妹だ。俺がどんなことになつても、決してあわてるでないぞ」

妹は美しい眉をひそめ、唇をかたく結んだまま肯いた。

「それぢやアいいか、俺はどうでも今夜公主屯まで行くが誰にも云ふでないぞ、

滿月郷の人達には尙更だぞ」

「王彩雲の本據へ乘込むの？」

「うむ、どうせ生きては還れまいよ」

「兄さん、行かないで、ね、兄さん！」

「莫迦を云へ、見ろこの鐵砲を。滿月郷の川口團長さんが、俺を信賴するそのしるしだと云つて貸して下さつたんだぞ。本部備へつけの尊い小銃だ、俺は命がけで出かける、そして大頭目に日本人の屯墾精神を話してやつてくるんだ」

「分りました、分りましたわ」

崇仁傑の捧げもつ小銃には、尊くも御紋章がきら〳〵と光つてゐた。門口につなかれた彼の乘馬は、蹄で凍つた大地を蹴り、高らかにいなないてゐるのだつた。

白樺谷はどこだ？

崇仁傑はその夜更け、馬に鞭つて公主屯へむかつたまま、家へも滿月郷へも戻つては來なかつた。

二日經ちそして三日經つた。

「團長、馬を貸して下さい。崇仁傑の行衞をさがして來ませう。あの男の安否も氣づかはれますし、御紋章のついた銃器が心配で耐りません」

「む、よく云つてくれた、賴むぞ！」

團員の森鐵次は馬に跨り、まづ崇仁傑の住んでゐた部落をばめざしたが、變つた樣子も見られない。はるか行途には白樺林の丘や谷間が、ふかふかと雪に埋もれてゐるばかりである。

（さうだ、公主屯には紅槍匪の祈禱所があるときいてゐたが、思ひきつて行つて見よう）

鐵次は馬に鞭をはげしくあてた。

地平のかなたに昇る朝日は、空を黄金色に染め、大地を掩ふ白雪にキラキラ照り映えてゐる。馬を走らせてゆくと、全身汗にグッショリぬれてくるのだつた。

「おーい！　おーい！」

誰かがよんでゐるらしかつた。

鐵次は馬の手綱をグイッとひきしめ右手の小高い丘を見上げると、紅帛をふる小柄な滿洲娘。（あッ春蘭だ！）ヒラリ馬からとびおりた鐵次は、雪を蹴散し、蹴散し、丘へ登つていつた。

「滿月郷の方、これを、これを見て下さい。兄は王に殺されたに違ひありません。三日經つて戻らなかつたらこれを開けて讀め、さう云つて殘していつた手紙がこ

れなんです」

「どら、見せてごらん！」

鐵次は凍える指先に力をこめつつ手紙をひろげた。

一俺の命は大地に落ちた一粒の麥だ。地に落ちても死にはしないぞ。俺の一命は失せても、この北滿の雪を染めた俺の血を、滿月郷の人々はさとつてくれよう。俺を信頼して貸して下さつた尊い小銃は、萬一の場合を考へ、白樺谷の左記地點へ埋めてゆく、必ず大切にとり出して、滿月郷へお返ししてくれ、これが兄の願ひだ」

と認めてある。鐵次はせきこんで訊いた。

「春蘭さん、白樺谷と云ふのは何處です。敎へて下さい、春蘭さん！」

雪崩れにうたれて

「白樺谷はあそこです。妾どんな事しても、掘り出さう、と此處まで來たんですが、足場が惡く谷が深く、女の身では――」

春蘭は美しい頬を恥しさうに染めるのだつた。

「よしッ、俺がとりに下らう、併しだ……」

鐵次も谷の深さには一寸驚いたらしく

「そんなこともあるまいが、萬一俺がしくじつたら、この鐵砲を二發つづけさまに空へ射つてくれ、必ず滿月郷から救援隊が來てくれる。よいか判つたね、春蘭」

鐵次は肩から小銃をはづすと彼女にわたした。

「氣をつけて下さいよ！」

「大丈夫だ、安心しといで」

鐵次は谷へ下る傾斜面を、白樺の幹にすがり、枝をたよつてズル／／ズル／／とおりていつた。

たしかに銃を埋めたらしい場所は、上から見ても雪がコンモリとうづ高く足で踏み固めた形跡が、あり／／とうかがはれるのだつた。

「うーむ、もう少しだ！」

鐵次が唸くやうに呟くと、

「もう少しよ、氣をつけてね……」

春蘭は小さな胸をドキ／／させながら、これまた白樺の梢にとりすがつたまま、ふかい谷底をのぞきこむのであつた。

（うーむ、あと七八間、十間とはあるまい！）

さう思つて鐵次が、上の春蘭に、

「おーい、もう直きだぞう」

かう叫びかけた途端である。ドドドドドッと崩れる雪にビシ、ビシ、ビシリッと折れた白樺の枝。

「あッ！」

と叫んだなり鐵次は、雪崩れに押されてドドッと谷底へころがり落ちていつた。

眼の前いちめんをたちこめる雪煙りに、春蘭はハッとしたが、幸ひ鐵次は雪に埋れず、上半身を雪崩れの中から起すと、埋めてあつた小銃をつかんで元氣よく振つて見せた。

「おーい、鐵砲うつてくれいッ、脚を折つちまつたんだ、脚が折れちまつたんだあ！」

春蘭は鐵次からあづかつておいた小銃をとりあげると、ひきがねを引いた。

ドドーン、ドドーン！

二發の彈丸は、白樺林の枝をバラバラ射ちぬいて、大空に轟然と鳴りひびいた。

女房杖は一本でよい

春めいた大平原には陽炎が燃えてゐたし、野草が芽ぐんでゐた。水路の根縁には發動機が据ゑつけられ、〆縄が淨らかに張りめぐらされてあつた。

しかも今日は松花江沿岸の船着場へ花嫁の群が流れを下つてくるのだつた。花婿になる團員達は勿論、花嫁を迎へぬ團員までが嬉しくてたまらないらしかつた。

「三造、何を愚圖々々してるんだ。はやくみんなと出掛けないか」

兄の鐵次はぢれつたさうにどなりつけた。

兩脇に松葉杖、顔も蒼ざめて元氣がなかつた。折れた右脚は、迚ももと通りに

はなるまい、と云はれてゐたのである。

「兄さ、俺、お光ちやんを迎へにゆくの止すせ」

「どうして。莫迦なこと云ふな、婿でない者まであんなによろこんでくれとるのに、お前は立派な花婿さんぢやないか、直ぐ迎へにゆけ、俺は脚が悪いんで遠慮してるんだぞ」

「だつて兄さ、俺、兄さに悪いと思ふんだ」

「何が、どうして？」

「兄さは滿月郷の爲に死んだ崇仁傑をさがしにいつて、そんな怪我しちまつた。不具になつちまつた。それだのに俺だけ故郷から嫁さんもらふなんて……俺は後でいいから、お光ちやんを兄さの嫁さんにしたらどうだい？」

「あはははは……」

鐵次は豪快に笑つた。

「いくら屯墾の俺達が、生めよ殖せよが天職だからつて、女房二人は持てんぞ！」

「えつ？　それぢやア兄さはほかに嫁さんきまつとるのかえ？」

「うむ、俺にはこれから一生の杖がゐるんでなあ。松葉杖は左右二本だが、女房と云ふ杖は一本でいい、ほら見ろ向ふから杖が歩いてくる」

「あ、春蘭さんか……」

「わははははは……あれだ、あれが俺の女房杖になつてくれるちうんぢや、内緒のはずがつい喋舌つちまつたよ」

「分つた兄さ、それぢやア俺、お光ちやん迎へにいつてくらあ」

三造は團員達が乘つてゆく馬車を急いで追ひかけた。

水路は開かれたり

船着場におりたつた花嫁達は、茫洋たる大陸にパッと咲いた花であつた。花婿、花嫁の初對面が終ると、花嫁荷物を大馬車につみこんだ馬車の一隊は一散に滿月郷へと走るのだつた。

川口團長の祝詞に對し、集團結婚の代表者として選ばれたのは鐵次だつた。三造ばかりか、團員全部があつとばかり驚かされた。

鐵次は松葉杖と、春蘭とに扶けられつつ、答辭をいそ〳〵と述べるのであつた。

「我々團員の手にはかね〴〵『新月磨鎌に似たり』と云ふ文字の彫まれた三日月鎌が與へられてゐました。その三日月鎌、即ち滿月郷魂は、いよ〳〵磨き研がれて、今年こそ秋の收穫に切れ味のよさを示し、併せて滿月のよろこびを見たいと

思つて居ります」

潮のやうにどよめく喝采のあと、川口團長は〆縄のはりめぐらされた大發動機のスキッチをいれた。いき〳〵と鳴りひびくモータアに、河水はグングンと吸ひあげられ、漫々たる水が大水路をひたしたと見るや、忽ちおの〳〵の小水路へサラ〳〵と小波をたてて流れこんでいつた。

「ばんざあいッ！　ばんざあいッ！」

滿月郷の人々は、つつみきれない喜びに湧きたつた。崇仁傑が歸順しなかつたら、紅槍匪に妨げられ、迚も手のつけられなかつた大水路である。もし崇仁傑が一命をすてなかつたら、或はこの水路も未完成のまま王彩雲一味に破壞されたかも知れない、併しいまは紅槍匪も討伐しつくされてしまつた。滿月郷入植早々の犧牲者や、崇仁傑の流した尊い血汐が、いまや水音たかく大地を縱横にうねるとも想はれるのだつた。

「今日は大いに飲んでくれよ」
川口團長は、高粱燒酎の盃をあげて好い御機嫌だつた。
「なあ鐵次君、君の答辭には、新月だの三日月鎌だの滿月鄕だのと、いろんなお月樣がひつぱり出されたが、たつたひとつ肝腎なことを忘れとつたね」
「はッ、何んでせうか？」
鐵次も盃をふくみながらきき返した。
「だつて君、今日も六十組もの集團結婚ぢやないか、密月と云ふやつをさ。わはははは……」
鐵次はうれしさうに首をすくめた。

大平原の英雄は誰だ？

轟々と轟々と、トラクタアは大平原を驀進する。野草生ひ繁る果なき曠野は、これが動くにつれ、地の底から黑い土が盛りあがつてくるのだ。見る見るうちに鋤き返され、まつくろな土があとから〳〵盛りあがつてゆく。これこそ大開拓だ、大陸建設だ。
川口團長を中心に、鐵次春蘭夫婦と三造お光夫婦とは、忠魂碑の丘からこの素晴らしさを眺めてゐた。
「うーむ凄いなあ、トラクタアは大平原の英雄だなあ」
と三造が叫んだ。
「いや〳〵英雄は外にあるよ。ありやア機械に過ぎんよ」

川口團長は不賛成らしく首をふつた。

「それぢやア忠魂碑にまつられた人達ですか」

鐵次が云つた。

入植當時、仇なす紅槍匪と戰つて死んだ五人の犠牲者がそこに祀つてある。

「うむ、それから？」

と團長は催促した。

「俺の鐵次兄さも英雄かな！」

三造が答へた。

「莫迦云へ、俺が隻脚なくした位で英雄なら、崇仁傑だつて英雄だぞ」

忠魂碑のましたに、崇仁傑の小さな墓があつた。

「勿論さ、それから？」

また川口團長は催促してゐる。

「さあて！」

三造が考へこむと、團長は彼の顔を指した。

「え？　俺が？」

「さうだとも——滿月郷に限らず、屯墾團の英雄は團員全部だ。大平原の英雄は、屯墾する人々だ、その精神だ、その力だ」

川口の聲は感激にふるへ、この頰には熱涙がホロ〳〵とこぼれた。

轟々と、轟々と、怪物トラクタアは平原を耕してゆく。

美しく輝く赤い夕陽は、終日勤勞に骨身をけづつた大平原の英雄たち、滿月團の人々に感謝を捧げ、その勞苦をほめそやす如く照り映え、日章旗はひらひらと力強く飜へつてゐた。

「妾日本人になれて嬉しいわ！」

春蘭は漸くつかひなれて來た日本語で鐵次に囁いた。

ああこの日からもう七年になるのだ。
滿月郷はいよ〳〵榮えてゐる。

（發行承認番號ア第三〇〇六〇四番）

昭和十八年一月廿五日印刷
昭和十八年一月廿一日發行
（一〇、〇〇〇部）

大空に生きる
定價金一圓五十錢

著者　伊藤松雄
發行者　先生友恒　東京市京橋區銀座七ノ四
印刷所　小室芳雄　東京市麹町區麹町二ノ一二　印協會員番號東東四七一番
發行所　文松堂　東京市京橋區銀座七ノ四　出版文協會員番號二二六番
配給所　日本出版配給株式會社　東京市麹町區飯田町二ノ九

文松堂刊讀物の評好き好らしき晴素

矢田挿雲著（裝幀 岩田專太郎） 價一・六〇 〒一五

修養太閤記

學生及青少年向の修養の書として、或は人を使ふ者にも使はれる者にも、將又人の親としても子としても、凡そ現世を生き拔かんとする者にとつて、身を貧に起し恬憺と人生を生き拔いた豐太閤の處世法を現代に活かせる大書は、またとない絕好の伴侶である

B列 六號
本文 三二〇頁
表紙六色プロセス

生方敏郎著（裝幀 石井柏亭） 價一・六〇 〒一五

源平太平記

確たる史實に基き、生方（うぶかた）先生雌伏十年の沈默を破つて本書成す。先生獨特の諷刺的筆致になる本書は單に小說を讀むといふより以上の面白さ、眞に迫るものがある。滑稽あり酒脫あり、悲慘事あり噴飯ものあり、源平各々大義を立てゝの戰ひが眼に見える樣である。

B列 六號
本文 三七〇頁
表紙六色プロセス

432
82

終